

日中国交の正常化

佐藤内閣は、空前の長命記録を残して、昭和四十七年夏退陣した。そして自民党の後継総裁は田中角栄、福田赳夫、三木武夫、そして不肖私の四人の間で争われ、田中角栄君が勝って組閣することになった。

これより先、昭和四十六年四月、私は前尾繁三郎さんの衣鉢をついで、「宏池会」(故池田勇人氏の創立した政治家の集団)の会長になった。この交代劇は、前尾さんが進んで目論んだものでもないが、私の仕組んだものでもなかった。その頃、前尾さんの健康がすぐれないことに加えて、佐藤さんの二回目の総裁選出馬に挑戦した前尾さんが、その三選に挑まなかったことから、宏池会内の若手を中心に不満が表面化した。

私は前尾さんが、引続き宏池会の面倒をみられるのであれば、それを拒むつもりはなかった。しかしそれに不満な若手が、私の説得に応ぜず、どうしても前尾さんと袂をわかっというのであれば、好むところではないが、その人たちを見殺しにすることはできないと考えた。また前尾さんが、宏池会の運営の責任を私に委ねるといっているのであれば、もちろん

それを引き受けなければなるまいと覚悟して、前尾さんの選択を求めた。前尾さんは、結局私に宏池会を委ねる道を選ばれ、私はそれを引受けることにした。

この推移は表向き自然であったように見えるが、人間の心理はそのように機械的なものではない。私の不徳の致すところも手伝って、前尾さんの私に対する態度は、その後、心なしに硬ばったものになっていたし、宏池会自体もしっくりした団結を示すには至らなかつた。そういう段階における総裁選出馬だったが、ここらあたりで総裁選への出場券を手に入れておこうというのが宏池会の大勢であつた。そしてその結果は、ほぼ予想通りのものであつた。一方、田中派とは、「何れが勝つても助け合おう」という約束をして総裁選に臨んだ。

第一回戦は田中、福田、大平、三木の順位になつたが、決戦投票で約束通り大平派は田中氏を支持して、田中新内閣が成立した。そうしたいきさつもあつて、新内閣の外交は私にやってくれということになり、私は、池田内閣いらい二度目の外相に就任した。

田中総理と私は、組閣後間もなくまずハワイに赴き、日米首脳会談に臨んだ。アメリカ側からはニクソン大統領、ロジャー・ス國務長官、キッシンジャー補佐官等が参加された。

会談はオアフ島の北端にあるクイリマという静かなホテルで、泊まり込みで行われた。田中新内閣は、この会談でまず日米安保体制を堅持することを米側に約束するとともに成否はわからないが、日中国交の正常化に手を染めたい旨表明した。アメリカ側は前者を多とし、後者については「その成功を祈る」ということであつた。

ただ、私の心配は、わが国が日米安保条約を堅持する以上、中国側が国交正常化の話に乗ってくるかどうかということであつた。何となれば、中国側はこれまで、日米安保体制に終始、批判的な言明を繰り返していたからである。

日米首脳会談後、私は中国側の出方をじつと見守つていた。ところが中国は、日米会談後出された日米共同声明には格別の反応を示さなかつた。そこで私は、日米安保条約を軸とするサンフランシスコ体制に中国側が物言いをつけないのであれば、多年の懸案である日中国交の正常化問題は、この際解決しておくべきだと考えた。中国の日米安保条約に対する態度は、柔軟で現実的になつてきたように見えた。もちろん、日中国交の正常化は、政府にとつて大きい外交課題であるとともに、すこぶる困難な政治問題でもあつた。それだけに、私はこの問題の処理は、内外にわたつて十分納得の行く公正なものでなければな

らず、その実行も熟した時期を選ばなければならぬものと、かねてから考えていた。私がサンフランシスコ体制を損なうことがない内容で、国連における代表権問題の帰結が明らかになった時期に、このことに当たるべきであると考えたのも、そのためであった。国連における中国代表権問題は、前年の秋、劇的な解決をみた。私はこの問題処理の機がようやく熟したと判断し、総理の決断を促して、正常化交渉にとりかかった。

いよいよ交渉をはじめてみると、中国側は、日米安保条約を軸とするサンフランシスコ体制に現実的な理解を示し、正常化の交渉は思ったよりスムーズに進んだ。私は、そういう現実的な理解と、柔軟な決断を示された中国首脳の見識を多とした。

正常化交渉における困難は、もちろん技術面にもあった。すなわち、われわれは日華平和条約をもち、その下で戦後の経営をやってきた。戦争の終結や賠償請求の放棄という問題は、中国側にとってはこの際解決すべき問題であるが、わが方にとってはすでに日華平和条約において処理済みの問題であった。この両者の立場をどのように調整するか、更には台湾に対する領有権を主張する中国側と、その領有権を放棄したわが国の立場をどう表現するか等も、決して容易な問題ではなかった。そういった諸問題は、相互の理解と信頼

がなければ合意に達することができないものではなかった。幸いに日中双方は、小異を捨てて大同につき、見解の相違は相違として並列的に書いたり、ヤーンヌス（ローマ神話の門口の神。体は一つであるが顔は二つあった）的な表現を工夫したりして、むずかしいこれらの問題を何とか克服することができ、歴史的な日中共同声明が出来上ったのである。その時は無我夢中であつたが、後で考えてみると、よくもこの険路を通り抜けることができたものだと、今更ながら胸をでおろしている。

私はまず、戦後におけるサンフランシスコ平和条約の締結に比肩するこの重大な外交案件が、平穩裡に処理されたことを喜ぶものである。また日中共同声明によつて敷設された軌道の上に、その後の両国の関係が、これまた平穩裡にかつ着実に進展していることをうれしく思っている。

それにしても、その当時健在であられた毛沢東主席と周恩来総理は、その後相次いで逝去された。もとより、この二人の偉大な指導者の見識と決断がなければ、日中国交正常化の仕事をこのような形で、このような時期に仕上げることは出来なかつたに相違ない。ここに謹んで、敬慕の情を披瀝して、両先生のご冥福を祈りたい。

中国の要人たち

私は昭和四十七年と四十九年に前後二回訪中して、そのたびごとに、毛沢東主席と周恩来総理にお目にかかる機会に恵まれた。毛主席は、二回とも中南海のほとりにある公舎の書齋で私を引見してくれた。談論風発で、スケールの大きい、茫洋たる風格の人のように思われた。

お話の筋は、いちいち細かくは覚えていないが、政治や外交、歴史や文化に関すること、さらにはご自身の生い立ちに及び、お話はきわめて率直で、かつユーモラスであった。私はそのお話を通して、歴史と民族に対する主席の揺るぎない信頼と愛情をかいま見ることができたように思う。

高齢のこととて、発声や足どりにやや不自由なところが見られたが、辞去する際わざわざ玄関まで送って頂き、暖かい手を差しのべられたときの感激は忘れられない。また、周総理その他の要人の毛主席に対するいんぎんな緊張した応接の態度も、私には印象的であ

った。「もつやがて天国からお迎えがやって来ますよ」と、何気なくいわれていたが、その主席にも生命の限界が訪れた。たまりかねた巨木が、ついに倒れた思いがする。

周恩来総理は、一口にいうと偉大な政治家であり、きわめて有能な外交家であり、超人的な行政家でもあられたように思う。私は数次にわたって会談し、交渉も持ったが、周総理は、公務に對し倦むことを知らぬ精力的な人であった。夜遅くから早朝におよぶ会談も、珍しくはなかった。歴史的な事実や、今日的な情報に関する知識は、きわめて正確で、よく整理し、よく消化されていたように思う。

周総理は、毛沢東主席と同様、中国に對する愛情と誇りを堅持されていたが、同時に中国のもつ後進性も、正確にわきまえておられた。他國に對しても、その長所は長所として、その短所は短所として、客觀的に評価することを忘れてはおられなかった。大國といえども畏れず、小國といえども侮るところがなかった。

周総理はまた、人に接してきわめて庶民的であられた。私どもの宿舎にも時折訪ねて来られたが、運転手や守衛、コックや掃除婦等に對しても、いつもにこやかに握手をされ、挨拶をかわすことを忘れられなかった。また、よく人の名を覚えておられた。われわれは

人の名を知るためには、ずいぶん努力を必要とするが、政治にとっていちばん肝心なことは、このことのように思われてならない。何となれば、どんな人でも自分の存在が地球と同じくらい大切なもので、誰でも自分の存在を人から認めてもらいたいものだからである。周総理は、巧まずしてそのことを心得かつ実践されていた人である。

また、食事の席でも周総理は、周囲の人々に周到なサービスを忘れられなかった。これも天成の外交家的資質のいたすところであるが、同時に相手の人格に対する評価と尊敬、さらには愛情のいたすところであったように思う。

しかし交渉相手としての周総理は、ねばり強い手ごわい人であった。日中航空協定の交渉の時、前後三回にわたる交渉にもかかわらず、話し合いは一步も前進せず、私は到頭帰国を決意して、お別れのご挨拶をし、宿舎に引き揚げたことがある。周総理はその時も、私の挨拶を従容として受けられ、「またいずれ再会しましょう」ということでお別れしたものである。(もっともその時は、翌日になって急転直下、合意に達することができた)

今にして思えば、周総理は私に最後までお目にかかった昭和四十九年には、すでに不治の病に冒されておられたようである。それにもかかわらず、昼夜をわかつた、ひたすら残さ

れた精力を公務に傾注され、祖国に奉仕されていたのだった。「中国は貧しいが、このくらいのお食事は差し上げることができます」とか、「中国はお国（日本）に多くのことを学ばねばならないと考えています」とかいわれた謙虚な言葉が忘れられない。しかし、その周總理は、米ソ両大国をはじめ世界の列強に対して、中国のもつ優し難い権威と揺るぎない主体性をもって対応し、見事に世界の評価と尊敬を集めておられた。この人は毛沢東主席とともに、歴史の経過につれて、ますますその光彩を放つ人であるにちがいない。